佐賀県立図書館だより

くすかぜ

2007 春号 —第509号—

「図書館先進県」を目指しています　佐賀県

積ん読の後悔

戯曲研究会主宰
山口　謙吾

双書類や全集物の中で書棚の飾り物になっていたり、机の上で「積ん読」の状態になっている本がある。その積ん読の中の一冊に何十回視線を向けてきたことか。

せきたてられての義務感からではなく、そのうちゆっくり吟味できる時に、と幾度も心でつぶやいてきた本である。古本で簡単には入手できない代物であった。機会を逃してはなるまじと、懐に相談して求めたはずだ。帰宅して机に置いた途端、所有した安心感からか直ぐ読みにかからず、他事に紛れて月日を重ねてきたのだった。

足を捻挫したある日、「そうだ」と例の一冊を取り出し、支払った時の代金に詫び言を唱えて、目次を追った。書店で目にした時の思いが蘇った。読み出した。夢中になって。

ゲルマンやラテンの語脈関係を八日がかりで俯瞰し、多くの新しい発見を手に入れた。

「あの時すぐに読んでおけばよかった」。一生の不覚と思った。外国文学への姿勢も変っていたはずだ。読むにつれ内なる心が打ち震え、自分の中の何かが変っていく、と実感できる本に出会えた時の感動と歓喜は、言葉では言い尽くせない。

「そのうち」は、とうとう来ずじまいになりがちである。また視点を変えれば、図書館は「積ん読宝の山」とも思える。

その山の一つが、三好十郎（佐賀市出身の劇作家）の遺産である。戯曲、評論、詩、小説等々、激動の昭和に挑んだ、血のにじむような五百点に及ぶ労作や資料である。

それは三好十郎研究家で京都市の三月書房主である宍戸恭一氏が2003年に佐賀県立図書館に寄贈されたものであり、早稲田大学演劇博物館所蔵のものにも劣らぬ貴重図書である。

時代を予見し、日本を憂え、炎となって叫び続け、若き世代に期待し続けた三好十郎。

情熱を持った若き魂の出現を期待しての寄贈でもあった。積ん読の状態にすべきではないし、その志を無にすべきでもない。

目次 CONTENTS

●巻頭言「積ん読の後悔」……1P
●レファレンスの受付方法が変わります……2P
●本で見る佐賀
●「佐賀近世史料」第八編第3巻を刊行しました……3P
●「こどもの読書週間」行事のお知らせ……4P
●県内各図書館の行事予定一覧……5P
●第3回郷土研究講座「佐賀城下に弥次さん喜多さんが!」……6P
　～新発見の蒲原(かもはら)大蔵(だいぞう)の小説から～
●古文書の紹介「桜田門外の変書簡」……7P
●レファレンス事例から……8P
●行事予定　●開館日カレンダー　●寄贈図書のお礼

佐賀県立図書館のご案内

所 在 地／〒840-0041
佐賀市城内2-1-41（県庁東）
T E L／0952-24-2900
F A X／0952-25-7049
Eメール／saga-kentosyo@manabisaga.jp
ホームページ／http://www.pref.saga.lg.jp/kentosyo/

開館時間／9:00～20:00
［児童閲覧室は10:00～17:00］
休 館 日／毎月の最後の水曜日
特別整理期間・年末年始